

NOW

宮城は現在も
いま
現実に
立ち向かう。

Vol.
24
April, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

IS.



ムーディ
勝山
in 亘理

ワハハと笑っておいしく食べて。



触れ合うと、もっと楽しくなる。
ムーディ勝山さんと巨理町の
おいしいものを食べる旅。

骨折した骨が強くなるような
「たくましさ」を感じた

「わあ、海、きれいですねえ！」。朝から降り続いた雨が上がり、雲の切れ間から陽射しが入り、注ぐ荒浜の海。ムーディ勝山さんは、感じ入ったように、声を上げました。この日、巨理町の荒浜地区と一緒に歩いたムーディさんは、震災後の2012年から、



「荒浜にぎわい回廊商店街」では、海の幸を使った海鮮丼や軽食を味わえます。

ラジオ番組の出演で毎週宮城県を訪れています。自分の故郷より頻繁に来ているかも。もはや第二の故郷みたいなもん」。当初沿岸部の取材は気を遣ったそうです。「海がきれいって言うのも、



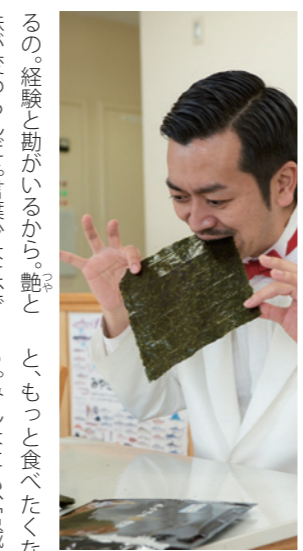
新たに導入したシステム船。機械の手を借りて、おいしい海苔をつくり続けようという思いです。ね、ちよっと感動します。

言っているのかなど。でも、実際に足を運ぶと、地元の人にはワハハって笑ってくれる。津波や地震のことを、笑い話のように話してくれる人もいます。たくましく

話を聞くと、もっと
おいしく感じる

次に訪れたのは、「あらはま海苔合同会社」。荒浜では、1000年ほど前から海苔養殖が始まり、阿武隈川から流れ込むミネラル豊富な水が、味のいい海苔を育てています。昔はたくさん生産者がいたんだけど、今は5人。津波で気持ち落ち込んだけど、自分たちがやらなかったら、荒浜の海苔は終わっちゃったから」と代表の菊地さんは、工場を案内しながらそう話します。

この日は、まず「荒浜にぎわい回廊商店街」の「魚屋 hide」でランチ。ムーディさんが選んだのは、期間限定の「豆目天丼」。満面の笑みで頬張る様子に、お店の人もニコニコです。「今日はヒラメやカレイがいい日だったんですよ」。ムーディさんも「この厚さー東京じゃ食べられない」と満足気です。雑貨店「RIOGRANDE」では、ハンドメイドだという巨理町名物「はらこ飯」のバッチを購入。さっそく、白いスーツの胸に付けていました。



通常海苔と特選を食べ比べ、「普通のも充分おいしいんだけど、特選うまい！風味が違います」とムーディさん

を抄いて、乾海苔をつくる巨大な機械に「すごいなあー」とムーディさん。菊地さんは「海苔の収穫に最新のシステム船を導入したことで、6人必要だった作業が1人でできるようになった」と話します。「でも、種付けとか仕上げとかには人間の手を入れ

る。経験と勘がいるから。艶々味が変わるんだ。言葉少なにでも胸を張ってそう話す菊地さんを見て、ムーディさんは「カッコいいなあ」。菊地さんたちが作った海苔を食べ、「ええーうまい！海苔の価値観が変わりました。「こーやって、地元の人の話を聞くのがいいですね」とムーディさん。ストーリーを聞いてホントにいいものだったって知

PROFILE

ムーディ勝山
もーでいかつやま



滋賀県草津市出身。よしもとクリエイティブ・エージェンシーに所属。タキシード姿でムード歌謡風の「右から来たものを左へ受け流すの歌」でブレイクするなど、お笑いピン芸人として活躍。現在はTBC東北放送のラジオ番組やチャリティライブへの出演など、地方での活動にも熱を注ぐ。

沼田佐和子

a walk!
this town!
この街の“今”を探る

あらはま海苔合同会社

巨理町荒浜地区では、明治時代から海苔養殖が続けられてきました。震災後、3軒となった海苔養殖業者は、先人から受け継がれてきた歴史や食文化を後世に伝えていきたいと、2015年6月に「あらはま海苔合同会社」を設立しました。

荒浜にぎわい回廊商店街

巨理町の観光の中心としてにぎわいを取り戻そうと、飲食店や海産物の販売店、サーフショップなど、被災した8店舗が2015年3月に商店街をオープン。毎月第1・3日曜日は、地元荒浜で水揚げされた海産物の販売イベントが開かれ、海の幸を堪能できます。

吉田浜海岸

砂の上を歩くと「キュッキュ」と鳴る鳴り砂海岸は全国に30カ所あり、その中でも、「吉田浜海岸」は日本最大級の鳴り砂海岸。震災の津波による瓦礫やゴミを、サーファーや環境保護団体が定期的に清掃し、鳴き声を取り戻しつつあります。

鳥の海ふれあい市場

毎朝水揚げされる新鮮な魚介や採れたての野菜、巨理町のお土産などが充実している市場。震災前はわたり温泉鳥の海1階に店舗を構えていましたが津波で被災し、2014年10月、きずなぼーとわたり1階で営業を再開しました。

わたり温泉鳥の海

2018年4月9日にリニューアルオープン。震災後は日帰り入浴のみでしたが、宿泊も再開します。太平洋を一望できる露天風呂などの入浴施設や、「はらこめし」など、季節ごとの郷土料理を堪能できるレストランも楽しめます。荒浜地区の新たな観光拠点として期待されています。



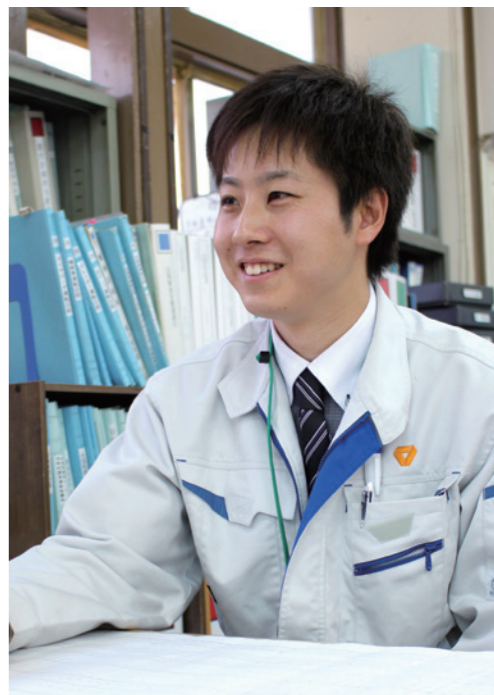
巨理町(愛宕山からの眺望)

the 応援職員

PROFILE

亶理町 都市建設課
かさま ちとせ
亶間 基希 さん
北海道伊達市より亶理町に派遣

Support Power



鳥の海公園の完成まで、もうひと踏ん張り。



亶間さんが携わった「鳥の海公園・サッカー場」

「鳥の海公園」には、避難の丘が併設されています。

亶理伊達家領主・伊達邦成の指導の下、その家臣・領民たちの集団移住で開拓が始まった縁から、亶理町と「ふるさと姉妹都市」を締結している北海道伊達市。東日本大震災発生後、いち早く派遣団を結成したり、被災したいちご農家の移住・再建を支援したり、亶理町復興の応援を続けています。その伊達市から亶理町に派遣されたのが亶間さん。着任して3度目の春を迎えました。

亶間さんが亶理町にきた当初は瓦礫が残る状態だった公園も、陸上競技場と野球場の復旧工事が完了。更地にして、かさ上げをして、ゼロから施設をつくる過程に携われたことは、自身にとっても良い経験になったと言います。「着任当初は、まだ若くて経験も浅い自分に業務が務まるか不安でしたが、周囲のサポートのおかげでやってこられました。業務量が多い分、勉強になることも多いですね」。

この打ち合わせ、工事の管理など、業務は多岐にわたります。特に公園の工事は、道路、水道などいろいろな要素が絡む特殊な案件。例えば、水道管はどういうものを使ったらいいか、トイレから下水管へのつなぎは問題ないかなど、専門的な知識が必要となる場面で、伊達市での経験が役立っています。

info/area

{エリア情報} 復興や防災にまつわるニュースをお伝えします



鳥の海公園陸上競技場・サッカー場・野球場の復旧工事が完了しました

鳥の海公園は、施設内に野球場と陸上競技場施設があり、陸上競技場内に新しく人工芝サッカーグラウンドが整備されました。施設の周辺工事は進行中のため、徐々に一般の方への使用が開始される予定です。

亶理教育委員会 生涯学習課スポーツ推進班
☎0223-34-0511



みずみずしい「いちご」をぜひ味わってみて

「東北一のいちご産地」の復活を目指し、亶理町では2013年に大型ハウスが完成し、本格的に再開しました。現在、町内2カ所の観光いちご園で、いちご狩り体験ができます。

JAみやぎ亶理吉田いちご園 ☎0223-34-9471
いちごランドこうちゃん園 ☎0223-34-4571
※詳細は「亶理町観光協会」HPでご覧いただけます。
http://www.datenawatari.jp/

今月のガイド



あらはま海苔合同会社 代表
菊地 幹彦 さん

「荒浜の漁場は、阿武隈川の淡水と太平洋の黒潮が交差し、海苔の生育や品質に必要な「栄養塩」が豊富です。荒浜の海苔は黒々として、色つやがよいのが特徴です。そう話すのは、祖父の代から続く海苔養殖の家業を受け継いできた菊地さん。

震災による津波で、養殖施設や工場の被害は大きく、家業再開は「今年は震災後1番いい水揚げ量になりそうです。それでも震災前の7割ですが。まだまだこれから」と話す菊地さん。これまで、荒浜の海苔はあまり認知されていなかったため、地元に着させたいですね。

記者の視点

住民つなぐ試み、一步一步



筆者プロフィール
河北新報社亶理支局
あだち こうたろう
安達 孝太郎 さん
1973年生まれ、東京都出身、1998年入社、亶理支局



お茶を飲みながら談笑するセリアの会亶理支部のメンバー

亶理町上浜街道の災害公営住宅の住民が、住宅内や地域でのつながりを強めようと住宅集会所で平日のサロン活動「たんぼほの会」を続けている。取材をしていて声が掛かり、男性陣の将棋に交せてもらったことがある。「この人、会ったことに見覚えがあったが、思い出せずにいた。」

数日後、記者が住むアパートの前で男性とばったり会った。公営住宅から歩いて5分ほどの所にある賃貸住宅の住人同士だったのだ。一年以上住んでいたのに、隣人との最初の接点を作ってくれたのは災害公営住宅の人たちだったことになる。「コミュニティを作るためには、地道に顔を合わせていくしかない」とたんぼほの会のメンバー。なるほど、こうやってコ

高齢者の防災のヒント


① 小さな地域交流が防災減災につながる!

日頃から地域のつながりを大切にしましょう。地域イベントで世代間交流を促進したり、隣近所の顔を知っておくことで、災害時の逃げ遅れを防いだり、困った時に「助けて」と声を上げることができます。

② 高齢者=助けられる立場ではない!

避難時や倒れた家具を戻すときには助けが必要でも、停電時の調理法やケガの応急処置など、高齢者の昔ながらの知恵が災害時に役立つこともあります。誰もが助ける側、助けられる側になることを覚えておきましょう。

地域づくりで防災減災!
「地域防災サポートチーム」



東北工業大学の地域安全安心センター、ボランティア部、野球部の学生や教職員で構成。主に八木山地域で行われる防災訓練・救命講習会へ参加するなど、地域防災活動に取り組んでいます。最近では認知症ケアパスの作成など、防災活動以外の視点から安心・安全に暮らす地域づくりをサポート。地域のつながりを強めることで、防災につなげる活動をしています。



高齢者を災害弱者にしない!

災害が起きた時、避難が遅れたり、ストレスを抱え込んだり、被害の影響を受けやすい立場にある高齢者。高齢化が進む社会では、他人事だと思わずに高齢者の防災について考えることが必要です。今回は、東北工業大学の学生や教職員が集まり、地域防災活動に取り組む「地域防災サポートチーム」の活動から、高齢者を災害弱者にしないヒントを探ります。

NOW IS.

防災

宮城県各地で行われている防災・減災の取り組みから、日々の備えに生かせるヒントを探していきます。

【取材協力】

東北工業大学 ライフデザイン学科 安全安心生活デザイン学科 伊藤 美由紀 准教授
地域安全安心センター副所長。地域防災サポートチーム結成当初から活動に携わるなど、学生とともに地域活動に参加している。



【お知らせ】
「地域防災サポートチーム」では、今年度も地域防災訓練や小中学校の防災教育に参加。地域防犯や支えあいと呼びかける講習会を実施していきます。詳しくは022-304-5594 (伊藤)までお問合せください。

見極めれば、海は怖くない。サーフィンと海の魅力を子どもたちに伝えたい。



(上)今は月に5~7回ほど海に出るといふ残間さん。現役を貫く姿に憧れるサーファーも多い。
(左)「リアルサーフ」には、さまざまなサーフィン用品が。「初心者からベテランまで」がコンセプト。

サーフィンができる海にビーチクリーンを実施

残間さんが、震災後初めてサーフィンをしたのは、2011年6月でした。「気落ちしている私に、千葉のサーフィン仲間が、気晴らしにこっちでやりなよ、と声をかけてくれました。やっぱりいいなと思いましたが、同時に、荒浜でサーフィンを再開するのは、できないなと思っていました。けれども、状況が落ち着くにつれて、周囲には再開を望む声が増えてきました。「町の人も、みんな早くサーフィンにきてほしいね、という感じだったし、自分もだんだん、やっていいのかな、という気持ちになっていきました。迷いがなかったわけではないですが、私もやはりできることなら荒浜の海に出かけたので。震災から2年後、津波で流されていたテトラポットを元に戻す工事が始まりました。海の準備ができたなら、と残間さんはビーチクリーンの取り組みを再開しました。「ビーチクリーンは震災前からずっとやっていたので、声をかけると仲間がすぐ集まってくれました。今も第2日曜日は、皆で集まってごみ拾いをしています。」

震災後、最初に荒浜でサーフィンができたときは、どんな気持ちでしたか、と聞くと、残間さんは少し黙って、かみしめるようにこう言いました。「人間って強いなと。よく戻った、ここまで戻ったか、と。7年たって、今でもそう思います。」

無理をしないで、逃げる海と上手に付き合って

自分の「庭」が、一瞬にして牙をむく経験をした荒浜のサーファー。震災を経験をし、気持ちの変化はあったのでしょうか。「自然災害は必ずあります。常に自分で状況判断して、上手に付き合うしかないでしょうね。無理だと思ったら、やめる。高波や、津波警報が出たら、すぐに逃げる。あの津波は

ひどい経験でしたが、自然と付き合う自分たちにとって、災害はつきもの。引き際を見極めるといふ基本をちゃんとやる以外ないでしょうね。残間さんは、最近、サーフィンをどうやって次の世代に伝えようかと、考えることが増えたと言います。「津波を経験した子どもたちは、海って怖いものだと思ってしまっています。そういう子に、上手に付き合えば安全だし、とてもいいものだ伝えたいです」。残間さんの経営する「リアルサーフ」では、初めてサーフィンする人に向けた無料体験も行っています。「浜に遊びに来れるようになれば、サーフィンを見る機会も増えるのですが、荒浜はまだ海水浴場が再開していません。子どもたちが、サーフィンに触れる機会を、作っていきたくと思っています。」サーフィンの聖地と言われる荒浜に、たくさんの人々が戻ってくるまであと少し。残間さんは、今日も海と向き合っています。

県内の海水浴場再開状況

2017年までに再開した海水浴場
……………6カ所
震災前(2010年)の海水浴場箇所数
……………26カ所



2017年に再開したサンオーレそではま(南三陸町)



PROFILE
サーフショップリアルサーフ
岩沼市出身。震災前は鳥の海でサーフショップを営む。2015年に、現在の荒浜にぎわい回廊商店街に店を構えた。サーフボードやウエットスーツを扱うほか、初心者向けの無料体験もしている。

01 地域コミュニティ再生支援事業

県では、被災地における住民主体のコミュニティ再生に向けた活動を支援しています。平成30年度の事業実施団体を募集します。

- 対象団体
 - ・災害公営住宅等に新たに設立された自治会等の住民団体
 - ・災害公営住宅等の住民の受け入れ先となった既存の自治会等の住民団体など
- 対象事業
 - ①地域コミュニティ再生支援事業補助金:地域住民で組織する団体が行う、地域コミュニティ再生活動に対して、その経費を補助
 - ②地域力再生活動アドバイザー事業
 - ③被災地域リーダー等研修・交流事業
- 募集時期
 - 平成30年5月、6月、8月、10月
- 県地域復興支援課 ☎022-211-2424
http://www.pref.miyagi.jp/site/hukkousien/komyu.html



02 「みやぎ・復興の歩み7」を発行しました

「みやぎ・復興の歩み7」は、平成29年3月から平成30年3月までの1年間の県内の復興状況や、復興に向けて取り組んでいる方々の想いなどをとりまとめた冊子です。

ウェブサイトで「みやぎ復興情報ポータルサイト」で公開するほか、ご希望の方には郵送いたします。ぜひご覧ください。

※無料で送りますが、冊数によっては着払いで対応させていただきます。

詳細は [みやぎ復興情報ポータルサイト](#) で検索

☎県震災復興推進課 ☎022-211-2443



MEDIA INFORMATION

みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから!

http://www.fukkomiyaagi.jp

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信します。

最新情報をブログで!

今月のブログピックアップ



いわたかれん 復興フォト 岩田 華伶



これまでの被災地訪問は90回を超える岩田さん。「写真」に願いを込めて、月1回被災地の状況を発信しています。今回は七ヶ浜町と多賀城市。2017年にオープンした「SHICHI NO REZORT」のホテルやカフェなどを訪れました。

NOW IS. 復興インタビュー

このブログでは、被災地で復興に向けてさまざまな取り組みを行う団体などを紹介します。

NOW IS.取材チーム

今なお復興への道筋を歩む被災地の「現在」と「現実」を伝えたいと、日々被災地をめぐっています。

@亘理町

亘理町のいちご農地は、震災の津波で大きな被害を受けましたが、2013年に大型ハウス「亘理町いちご団地」が整備されました。今回は、「株式会社和莓(なごみちご)」の「おらほのいちご」についての取り組みをご紹介します。



詳しくは、「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧ください。

- いまを発信!復興みやぎ SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしております。ハッシュタグ「#fukkomiyaagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。
- NOW IS.メールマガジン NOW IS.の発行日(土日・祝日のときは翌平日)にメールでお知らせします。 [NOW IS.メールマガジン](#) で検索して登録!



「知る人ぞ知る」海苔の名産地

「本当はもっと地元の人にも食べてもらいたい」とあらはま海苔合同会社の菊地さんはつぶやきます。流通は、ほとんどが町の外。「地元でいい海苔があるって知らせていけたら」。町内では鳥の海ふれあい市場で購入できます。市場の店長は自慢げに「おいしいでしょう。昔からの人は、わざわざ買ってくるんだよ」。試食した取材陣が思わず買いたった荒浜の海苔。有名な産地に劣らない上質な味わいを、ぜひ。



Vol.
24
April, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

宮城は現在も
いま
現実に
立ち向かう。

NOW IS.

サーフショップ
リアルサーフ

残間
祥夫

人間の強さが取り戻した 荒浜のおだやかな海。

海岸まで自転車で数分。波の音が聞こえる場所に、サーフショップ「リアルサーフ」があります。オーナーの残間さんは、若いころから頻繁に荒浜に通っていました。「サーフィンを始めたのは、もう39年前。友達の家が経営している海の家に、当時珍しかったサーフボードが置いてあって、試しに乗ってみたのが最初でした」。遠浅の海、テトラポットが強い波を消す荒浜は初心者にとって。残間さんは、瞬く間にサーフィンの

魅力に取りつかれました。「いつまでたっても納得のいく波乗りができないんですよ。それがおもしろい。波は、ひとつとして同じものがないから、いつも目の前の波の変化についていけないといけな。永遠にゴールがないんです。飽きないです」。

庭のような荒浜の海。けれども、津波の2日後に残間さんが目にしたのは、慣れ親しんだ海の変わり果てた姿でした。「もう東北でサーフィンができないな、と。無理だと思いました」。